

東京都青少年問題協議会
第2回若者部会
議事録

日 時：令和6年7月22日（月曜日）

午後3時30分～5時32分

場 所：第一本庁舎34階北棟34A会議室

午後 3 時 3 0 分開会

○山本課長 お待たせいたしました。定刻となりましたので、ただいまから東京都青少年問題協議会第 2 回専門部会若者部会を開催いたします。

本専門部会は、東京都青少年問題協議会総会の運営規定に準じ、原則公開となっております。議事録につきましても同様の扱いとなりますので、ご承知おき願います。

次に、資料の確認をいたします。こちらのお手元の画面、第 2 回若者部会資料を押していただきますと、まず、最初に次第がございまして、続いて、本日の資料が 2 枚ございます。そのあと、資料 2 として名簿です。以上の資料となっております。

それでは、このあとの進行は、土肥部会長へお願いしたいと存じます。土肥委員、よろしくお願いいたします。

○土肥部会長 よろしく申し上げます。では、次第に沿って進行させていただきたいと思えます。まず、次第 2 の事務局説明に移りたいと思えますので、事務局よりお願いいたします。

○山本課長 それでは、説明させていただきます。

第 1 回の若者部会では、困難を抱える若者からの意見を聴くための仕組みについて、様々なご意見をいただきました。

主なご意見を紹介させていただきます。

資料 1 です。ご覧いただければと存じます。

意見を聴く方法・手段に関するものといしましては、大きく分けて、子供・若者の様々な状況に合わせた多層的な聴き方が必要である。

また、その下、若者が集まる居場所などに出向いていく。

3 つ目として、若者と信頼関係ができている支援団体と連携する。また、支援団体等とつながりが無い若者に対しては、オンラインや YouTube などの活用というご意見もございました。

また、若者から意見が集まる相談窓口の活用といった意見をいただいております。

また、その下、意見を聴くに当たって重要な事項といしましては、まず、当事者との信頼関係が重要だと。

その下でございしますが、理路整然でない意見をはじめ、様々な意見をどのように反

映していくのか、また、当事者意識を持てるテーマかどうか。

その下ですが、興味を持てる質問にどのように変換していくのか等のご意見をいただいております。

これらのご意見を踏まえまして、今回の第2回若者部会では、実際に意見を聴くための具体的方法について取りまとめていきたいと考えております。

次のページをご覧ください。

第1回のご意見を踏まえまして、皆様のご意見を総合すると、こういうことじゃないかと考えられる取組み案を2点お示ししております。

1点目は、困難を抱える若者が集まる場所（居場所など）に直接出向いたアウトリーチ型方法でございます。

まず、聴く主体といたしましては、誰が聴くということですが、都が委託する事業者とし、実際に聞き取る際には、ファシリテーターの方などに求められるスキルといったものを、仕様書に我々のほうで条件付けをすることを想定しております。

また、受託者は聴取りを行う場を運営する支援団体等と事前にすり合わせを行いまして、若者が安心して話せる環境を整備していきます。

次に、対象でございますが、誰に聴くかというところです。18歳以上のヤングケアラーであったり、依存症、オーバードーズに悩む方、障害をお持ちの方、若年無業（ニート）の方、ひきこもり、貧困、孤独孤立など、困難な状況に置かれた若者全般を想定しております。そのとき、そのときで対象が変わってくると思っております。

さらに、聴く場所、どこで聴くというところです。場所といたしましては、先ほどの対象に応じて、ふさわしい場所を有識者の監修を得て選定してまいります。これは仮想空間の居場所やオンラインゲーム空間なども含んでいると考えております。

そして、聴く内容、何を聴くかでございますが、聴く内容といたしましては、都庁の各局が施策立案等に際して意見聴取したいテーマといったものを募集し、選定していきたいと思っております。

これは一例でございますが、例えば、この右の矢印、四角枠で囲っておりますが、困難を抱えた若者にとって求められる居場所とはどのようなものかというテーマの際には、聴く内容といたしましては、基礎情報（年齢、自認する性、職業）の他、困っ

たときに相談する人がいるか、いる場合は誰か。どのような困難な状況を抱えていらっしゃるか、もしくはいたか。ココの居場所は、あなたにとってどのような効果があったのか等々、いくつか挙げておりますが、これらの内容を想定しております。これは、一例でございます。

最後に、聴き取りました結果の施策への反映方法のところですが、この結果を所管局に還元していきたいと考えております。

2点目につきましては、その下、居場所や支援機関にアクセスできない若者方もいらっしゃいますので、そういった若者に対応したオンラインツールの活用型の方法もあると思っております。

これは、聴く主体といたしましては、例えば、若者相談を行うユーチューバーと東京都が協力して、その協力のもとで実施するような形が挙げられます。

聴く場所でございますが、オンラインであるため、YouTube のコメント欄などを活用することも挙げられます。

その他につきましては、先ほどのアウトリーチ型方法と同様でございます。

以上、取組み案をご紹介させていただきました。

まずは、こちらにつきましてご意見等をいただき、なるべく今回で具体化していただけたらいいなと考えておりますので、ぜひよろしくお願いいたします。

○土肥部会長 ありがとうございます。

それでは、次第3の意見交換に移りたいと思います。

今、事務局からご説明しましたとおり、1回目の議論を踏まえた内容をこの2枚のペーパーにまとめていただいたというようなことになります。

困難を有する若者から意見を聴く取組みについて集中的に議論するのは、今回までとなりますので、言い残しがないようにご意見いただければと思っております。

事前に意見をいただいているかと思うのですが、どこからというのもあるんですが、2時間ありますので、まず、このアウトリーチ型の手法というところから絞って議論して、後半でオンラインツール型の活用というところと、もし、全体でご意見があればというような形で進めていければと思いますが、よろしいでしょうか。

では、まずアウトリーチ型の方法に関して、何かご意見のある方はいらっしゃいま

すでしょうか。

どこから切り込むかという感じではあるんですが、いろいろな論点があるかと思うので、では、お願いします。

○荒井委員 荒井です。私たち、実際に運営している団体の立場から見て、居場所にある種定着して、居場所で話が聞ける属性というの、また、これは偏りがあるんだろうなという気がしていて、

居場所に集まる人たちにヒアリングするというのと、居場所とかに来れない人たちにヒアリングするという、この2本立てだと思うのですが、その若者の居場所とかに馴染むような子とそうじゃない子がいるなとなったときに、この2つのやり方だと漏れが出るなという気がしています。

前回も、私、伝えたかと思うのですが、相談窓口とかに来る若者と居場所に定着する若者とは若干層が違ような気もするので、相談窓口でどうやって若者の声を聴くかというの、一つ観点として入れられるといいんじゃないのかと思うので、そのあたりをまず大きなところから考えたいと思いました。

○土肥部会長 ありがとうございます。西山さん。

○西山委員 そもそもみたいなのところになるかなという気がしますが、事業者が聴くみたいな案として出していただいて、そうすると、荒井さんがおっしゃるとおり、どこの団体に行くのか、どこの場所に行くのかというところで、偏りがどうしても出てしまうようなというのが、私もすごく同感で、そうなったときに、事業者が聴くというよりも、それぞれの居場所だったりとか、それぞれの相談窓口だったりとか、支援団体以外にも私がいるような、割とポジティブな子が集まるようなコミュニティだったりとか、いろいろな活動をされている方々がいるというのは、実際あるところで。

その人たちが、共通のビジョンを持ち、その人たちが協力し合って、集めて、より全体としてよくなっていくみたいな形でないのかと思っていて、そうすると、声を聴く場所に限定されることがないし、それぞれが協力し合えとか、つながり合える環境を、そもそもつくる必要があるではないか。

若者会議と参加者さんと全然つながりがないのですが、ここがつながっていると、情報もより多く蓄積することができるし、我々は、困難を抱える若者に関して全然詳

しくはないのですが、でも、若者全体がよりよくなってほしいということを思っていて、そのあと相談するみたいなことも、もしかしたらできるかもしれないしとか、そういう意味で、まず、ここの横がつながるというのができたらいいのかなというのを思っていました。まさに、プラットフォーム的な考え方かと思うのですが。

○土肥部会長 前回、自分の中でお話ししていましたが、若者団体の連合体じゃないですが、みたいな形とかもあったりはしますが、これもどういう基準で参加できるようにするのかという話がまたくっついてくるので、アウトリーチとオンラインツールの活用という、そういう二段構えで考えてくださったのかと思うのですが。

あと、確か東京都で実際は、こども都庁モニターの中とか、子供意見聴取の中とか、かなり幅広い子供の居場所だったりとか、子供たちが集まるところに何個か選んで聴くとかというやり方をされていたかと思って、僕が知る限り、かなりの数に行かれたんじゃないかと思うので。

そういうふうにしても、もしかすると今度は聴かれないんじゃないかというところが出てきてしまうかもしれないですが、網羅性はかなりすごかったなとは思いました。

全体の座組の話が皆さんから出ているので、まず、その点から整理して、ご意見を伺えればと思いますが、ほかの方はいかがですか。

○小奈委員 今回、何を聴くというところで、いろいろテーマごとに、お話を伺っていくということになると思うんですが、そうなってくると、例えば、今回ヤングケアラーについて話を聴くということであれば、例えば、うちに来ているような、宿泊型で親御さんからお金を出してもらって寮に住んでいますよという人は、ヤングケアラーと関係がなくなってしまうじゃないですか。

なので、それこそ、ヤングケアラーとかを、主に支援している団体さんは、それこそたくさんあると思うんですが、例えば、それは、障害であれば、障害者は基本的に、例えば、グループホームに所属していたりとか、あとは、日中帯だと作業所、A型作業所、B型作業所であると思うんですが、日中活動で、例えば、箱を折ったりとか、そういうのをしているんですよね。

なので、そういったところに直接聴きに行く。もちろん、作業所に来ている人限定になってしまうとは思いますが、そういった形で、聴くテーマごとに、そこは赴く

場所を変えてしまってもいいのではないかなとは考えております。

○土肥部会長　いかがですか。

○大橋委員　今回、この若者から意見を聴くという話の中で、いかに普段基本的に意見を聴かれない若者を、漏れなく意見を聴くかという話と、あとは、この意見を聴いたというのがいかに、これは前回も少し申し上げた部分があるんですが、いかにポジティブな若者の経験になるかという、ここの点はすごく外せないのだろうと思っています。

例えば、いかにどれだけ多くの若者から意見を聴いても、それが、結局何も聴かれても意味なかったという経験だったら、それは、逆に聴くことは、マイナスに働いてしまうという可能性がすごくあるのだろうと思ったときに、ここの施策への意見の反映の方法という部分、事前の意見のシートでも書かせていただいたんですが、ここがすごく鍵になってくるのかと思いました。

そのときに、今小奈委員もおっしゃっていましたが、実際に自分の意見がどう反映されるのかと、ちゃんとそこが自分に興味関心のあるテーマについて聴かれたりとか、それがしっかり自分の意見がそのあとどうなっているのかというフィードバックの部分がいかに充実するのかというのが、すごく重要な観点だと思うので、それも踏まえて、誰に、どのように聴くのかというところは設定が必要なのかと思いました。

その中で意見が実際に聴かれない、どこに行くかというのを選ぶ上で、当然そこは聴かれない人が出るというのは、これは、こういう事業をやっているにおいては、ある程度仕方ない部分は正直あるのかと思っていて、そこは自分たちがいかにそういう若者を生み出せないかという観点で突き詰めるしかないのかな。

それは絶対どうして生まれてしまうものだと思うので、そこは、そういう観点到突き進むしかないのかと思ったのが、全体としてアウトリーチ型についての意見です。

もう一つが、今回、後半でということだったんですが、全体の立付けという意味で、このオンライン型の部分ですが、ここについては、そもそも、今回基本的には困難を抱える若者にどう意見を聴くかというところがテーマになっていると思うんですが、

はたしてこのオンラインのこういうターゲット的じゃないユニバーサル的な聴き方で、そういう若者にターゲットを絞ることができるのか、それをオンラインの、例え

ば、SNSを使った形でやるのが適しているのかというのは、一つ自分の中では、今日話し合いたい議論ではあります。

オンラインとかの中でも、ここに、アウトリーチ型に書いているような仮想の居場所であったりとか、オンライン空間というのは、ある程度ターゲット的に絞れると思うのですが、SNSというのは、ある程度ターゲット的じゃなくて、広くというところがあると思うので、それがオンラインのある意味強みですし、今回のターゲットに絞ったときに、オンラインツールがいいのかというのは議論が必要だと思うのと、そういう意味では、例えば、ここに書いてあるようなヤングケアラーであったりとか、孤立・孤独というところは、別にこれは、一般的に学校に当然この子たちは普通に通っていたりとか、この子たちが何か社会の中から切り離されて生活しているわけではないので、そもそも若者から意見を聴くという活動のパイを大きくすることによって、結果的にそういう子達からの声を広げるというような、もしかしたらツールの使い方としてのほうが、SNSとかはいいのかなと感じた次第です。

○土肥部会長 ありがとうございます。與那覇さん。

○與那覇委員 私も、この回答する側の方たちが、自分が何のためにこの事業に参加しているのかという動機が大事かと思っていまして、大橋さんがおっしゃっていたとおり、この施策に自分の意見がどのように還元されたかというのが分かるような仕組みがとても大事だと思いました。

あと1点は、対象の方たちが、この事業をやっているというのを知る機会が多い方がいいと思っていますので、広告とか、例えば、相談窓口にポスターを貼っておくだけでもいいのですが、そういう広告でみんなが知る機会が多い方がいいのではないかなとは思っていました。

○土肥部会長 ありがとうございます。

冒頭で出た荒井さんからの相談窓口での意見を聴くというのは、具体的にどういう動線をイメージされるのか、聞いてみたいと思ったのですが、というのは、割と相談窓口も相談員の方がずっと、要するに聴いているってものだけではないということですよね。

メールとかいろいろな手法で、何か、もしアイデアとかがあれば。

○荒井委員 まず、LINE相談とか、オンラインとかで相談の窓口があったときに、そこにある種、今回の聴きたいアンケートがばらまかれるのが一つかと思いますし、窓口とかに相談に来たときに、何か相談の最後のほうに、そういう意見をもらうようなアンケートなのか、何か仕組みがあったらいいんじゃないのかと思うので、そういう仕組みは必要かと思います。そんな感じです。

○土肥部会長 相談窓口の活用というのは、実際に検討は可能ですか。

○山本課長 前回、荒井委員のお話を聞いて、うちですと、若ナビαという相談窓口があって、電話が圧倒的に多いですが、電話相談とLINEと、あと、昨年の終わりからはチャットボットでもやってたりするのですが、年間1万件の相談が集まってくるんですね。

それは、よく考えてみれば、荒井委員のおっしゃるように、何かを聴くわけじゃないのですが、若者の悩みが集結しているわけじゃないですか。

ある意味、これを、今までは分析等は、単純な分析はしていますよね、20代の女性が多いとか、そういうのはやっていますが、その内容そのものを分析してみたいなこと、確かにそういったことをやってみるのも、ある意味、若者の意見を聴くということになっているかと思ったんですが。

○荒井委員 相談窓口へ行ったあと、アンケートとかが、例えば、どういう仕組みかあれですが、送られてきて、全然声を聴いてくれなかったとか、そういうフィードバックとか回答ができる何か仕組みもあったらいいと思います。

○西山委員 そこに溜まっている情報というのは、都が受け取って、それが子育てに還元されるみたいなこともあるのかもしれないですが、それは、全体として蓄積されて、公開されるみたいなことは、今はないですか。

○山本課長 分析したにしろ、極めて個人情報の集まりですので、施策にその分析結果は、分析そのものを大分削いだ公開の仕方だと思うんですが。土肥座長からも、AIで分析してみたらおもしろいんじゃないかみたいな。

○土肥部会長 今、2つあって、相談窓口に集まってきている声をどういうふうに反映させていくかということと、そこに集まってきた人たちに対して、何らかの形で意見を聴くというワンクッションが持てるかどうかということかと思います。

電話相談の方とかだと、もう一回折り返し電話するとかできないと思うので、都としても「意見を聴く取り組みをしていますよ」と言っていたのか、電話していただくときの、最初の動線のところで、意見聴取の方法も案内するのかとか、検討が必要かと思いますが。

相談窓口については、一度検討ができればと思いました。

あともう一つ、新しいというか、前回から出ていましたが、全体像の中で出ているのが、そういう支援団体とか若者団体のフォーラム型組織というか、ネットワーク組織みたいなものの可能性というのも、今、意見として出ているのかと思いますが、これについてももう少し具体的なアイデアとかご意見がある方はいらっしゃいますか。

○西山委員 ネットワークも重要だけれども、相談窓口も同じような内容を聴ける状態というのと、同じように、ほかの若者に関わる人たちが同じようなことを聴いて、それを、一気に蓄積できる仕組みみたいなものが、こっちのほうがこの施策に還元するという意味では重要なのかと想着いて。

○土肥部会長 それは、支援団体に限れば、支援団体のところに集まってきている、支援団体者目線での施策にもっと反映したほうがいいんじゃないかという意見ということですかね。

○西山委員 そもそも、東京都としてこういう意見も求めているんですみたいな。それを、まず支援団体にもしっかり若者団体にまず共有できる状態というのが必要なかと思いますが。まず、そこからかもしれないと思いました。

○山本課長 一つ、これをご紹介させていただいて、もしかしたら、西山委員の御意見に叶うかどうかですが、今年の11月からのオープンに間に合わせようと思っていて、今、ポータルサイトを今つくっているところです。

この若ばた+というのは、基本は、自分の悩みに応じた支援団体を探せます、居場所を探せます、ということで、その検索機能を持ったポータルサイトですが、これは、コラムとか、いろいろなコンテンツも充実させていこうとは思っているのですが。

一方、支援団体さんが入る専用のページというのがあります。ログインしていただければ、いつでも支援団体さんが自らの情報というのを更新できるのですね。例えば、「水曜オープンだったのが、休日になります。休みます」とかということもすぐ更新

できるように、この専用ページを支援機関同士の連携につなげていけたらいいなど。行く行くは、例えば、支援機関同士が書き込めるような掲示板ができたりとか、「こんなことで悩んでるんだけど、どこかで受け入れてくれる団体さんいませんか」とか、そういった情報共有ができるようなものになっていくといいと思っているんです。これで、例えば、何かを東京都が投げかけて、それこそ「意見聴取したいんですが、協力してくれる団体さんはいますか」とか、みたいなことも活用できたらと思っています。

○小奈委員 そこにテーマを言ってもらえれば、例えば、「うちはヤングケアラーの人たちがいっぱいいるので、じゃ、私たち、意見をもらえますよ」みたいな感じもできますものね。

○山本課長 委託で、例えば、コンサルさんが取ったとしても、実際に聴きに行くところは、若者を知っている団体じゃないとなかなかコンサルの方が行って、行く先の団体さんと連携するにしろ、「ここに聴きに行ったらいいよね」というのが、コンサルだと分からないと思うんです。

そこが、実際に仕組みをつくる時にコンサルに投げたはいいけれども、「これに適した団体はここですよ。あそこですよ」とかというのが、どう分かるのだろうか。

○西山委員 コンサルに委託するみたいになると、事業の切れ目みたいなところがどうしてもあるだろうと思うと、「持続的にいろいろなところから収集できます」みたいな、この仕組みは非常にいいと思ったのですが。これができるといいと思います。

○土肥部会長 これは行政の施設というか、支援団体だけではなくて、民間も登録できるようにしているということですか。

○山本課長 今登録団体も集めていまして、260団体ぐらいですかね。でも、圧倒的に、7割は公的機関です。区市町村の公的機関だったりで、3割ぐらいのNPO等の皆様がまず入っていただいていて、これからお声がけしてどんどん増やしていきたいと思っています。

○土肥部会長 この辺は、支援団体側の皆さんからご意見はありますか。

○大橋委員 今の、どこがどこに委託するのかみたいな話でいくと、本当に課長おっしゃったとおりだと思っていて。そうすると、ここでふさわしい場所の有識者の監修

を得てみたいな感じで、この有識者の監修みたいなところをどうするのかというのは、結構大きな論点になってくるのかと思っていて。

ここを、例えば、そのスーパーバイズみたいな感じで、ここもどこかに、それこそNPOに委託するのか、それともここの部分を、先ほど土肥さんがおっしゃったような、何かネットワークとか、フォーラム的な組織をつくって、そこが何か助言をするみたいな形にするのか。

ある程度そうしたような、実際にそれぞれ個別で、もし聴くときはその支援団体の方と協力しながらということだと思うんですが、全体として、そもそもどういう方針で進めるのかという、全体の方針についても、ある程度、そのスーパーバイズ的にできるような、専門団体というのは確実に必要なのだろうなあというのは、今のお話を聞いて思いました。

○土肥部会長 単年度で終わらない前提であれば、調査研究的な意味合いもあって、聴き方とかどうやって聴くのかというのをブラッシュアップしていかなければいけないと思うので、聴いている横で、「それをもっとこういうふうに聞いたほうがいいよね」というのを、言われたようなネットワーク会議なのか、何らかでブラッシュアップしていくというような考え方も必要かと思いました。

○大橋委員 このもの自体も、もちろんこれは行政でやる事業だと思うんですが、やったこと自体は、各支援現場でのナレッジの蓄積にもなって、各支援現場でもこういうことをやってきていない部分があるので、そうなってくると、そういう終わったあとの学びの共有だったりとかという意味においては、本当にそういうネットワークとかフォーラム型の何かものができる、それは各現場にとってプラスかと思います。

○土肥部会長 何かありますか。荒井さん。

○荒井委員 若干観点が変わるかもしれないですが、支援をつくっていく立場からすると、支援をこれからつくるか、制度をつくる人がヒアリングに行ったほうがいいんじゃないのかと思って。

「これは委託しないといけないんですか」というのは1つ聞きたいと思っていて、もちろん、忙しいだろうなということは重々承知の上で、これから若者の支援をつくっていくんだ、制度をつくっていくんだというときに、ぜひ、皆さんにはこのヒアリ

ングの場に来ていただければと思うのと、皆さんが、「あの団体を知っている」「この団体を知っている」とか、一番詳しくなっていくことが、一番かと思っています。

もちろん担当が変わったりすることがあると思うんですが、担当が変わるたびに、いろいろな団体にヒアリングに行ったり、当事者に話を聴きに行ったりして、皆さんが詳しくなっていくということが、一つじゃないかと思うので、委託しないやり方というのはあり得ないのかというのが、そもそも聞いてみたいと思いました。

○土肥部会長 そういう専門の部署とか人材を、都の中に置くというやり方は、委託するよりも若干組織をいじらないといけないので、難易度が上がるかもしれませんが。

○山本課長 人をつけるというのは、なかなか難しいですが、おっしゃったように、同席するというのは確かにそうだろうと思います。

都の職員も一緒に同席したほうがたぶん聴かれていると思っていただけるか、逆に来てほしくないですかね、どうですか。聴かれる若者は行政が来て、と思っちゃうのか。

○土肥部会長 それはコンサルなどの業者が来るのも、そんなに変わらないような気がします。

○荒井委員 都の人に直接伝えるというのは、「こういう人たちに声を届ければいいんだ」という意味になるので、一つ大きいのではないかと思います。

あと、「聴いている」という姿勢を感じられると、若者たちからすると、これまでと違う感じもするのかなと思いました。

○小奈委員 先ほど、大橋さんがおっしゃられたように、各若者たちの信頼を失うじゃないですが、意見を言ったけれども、反映されてないみたいな失望感みたいな部分というのは、意見が反映されなかったもそうだと思うんですが、「コンサルに委託するんだね」というのもあるかもしれないと思うんです。

直接、「都の人がここまで直接来てくれたんだ」というその心意気を買ってくれていう部分もあると思うんですよ。

○土肥部会長 現実的にはそういうことが可能か分からないですが、それこそ、こども家庭庁も、今、NPOの人材が、こども家庭庁に人材交流みたいな形で入ってきたりはしているので、そういう特別枠みたいな形でやることができるのかとか、

あるいは、都の方が1年間とか、どこか東京都内の若者支援団体に出向されて、そういう力を身につけるみたいなこととかも、施策としてはあり得る方法なのかなとは思いました。

外部のスーパーバイザーをつけるのもいいかもしれないですね。そういう方が、コンサルの方と伴走して支援していただくみたいなこととかも、やり方としてはあり得るのではないかと思います。

○山本課長　それで、むしろちゃんと聴けたのかということもチェックしていただくということですかね。

○土肥部会長　「委託し続けるのか」みたいなところもあるかと思うので、言われるように、都として続けられる仕組みをつくっていくことも重要かと思います。すぐ一足飛びにはいけないと思うんですが。委託ではないとなると、ちょっと前提が変わってくるみたいなことになりますが。

ただ、恐らく現実的には、次年度という単位だと、どこかに委託するような流れになるのだろうと思うのと、もう少し、このアウトリーチ型の手法のやり方をブラッシュアップできればと思いますが、今、全体感の話が多かったのも、もし次年度を進めるとなると、この2のアウトリーチ型の手法の座組について、何かご意見のある方はいらっしゃいますか。

○山本課長　ぜひ、細かい注文がいただけると。

○土肥部会長　1点、大橋さんに言っていた、反映方法というところだけじゃなくて、恐らくここにフィードバックというのも付け加えていただくというのが必要かなと、お話を伺って思ったところです。

○大橋委員　そこは、自分の中でもこれを聴く中で、すごく重要な観点だろうと思っていて、これが実際に反映されるかどうか、それをどう実際に都のほうで考えて、別に反映される、されないという結果の部分というよりは、プロセスがいかにしっかり透明的になって、ある意味、スピード感も含めてだと思うんですが、特に若者だと1年後にそれを言われても「何の話だっけ」となっちゃうので、その辺のスピード感もこういう事業とは、ある意味相性がよくない部分もあると思うので、その辺のスピードも重要だと思うのですが。

そのあとしっかりフォローして、なので、その2回目、もしかしたら行くのか、それがどういう部分で伝えるのかはあれですが。そのあとどうなったかというところの部分と、あとのフォローみたいなのは、ちゃんとこの事業の中では、ここにある意味、肝なんだろうなとは思っていて、こども家庭庁の、以前いただいたこどもの意見を聴くガイドラインで、2つあったと思ったんですが、2つ目は、この経験がいかに関係・若者のためになるかという感じだったと思うので、そこの観点がすごく大切にしたいのかなというところと。

あと、細かくなってしまうのですが、子供とか、若者が自分の声とかが、いかに、ある意味、求められているのかとか、それが社会的に重要なのかというのを感じるという機会になることがすごく重要だと思っていて、それは、先ほど荒井委員がおっしゃった、都の方が行くというのも、その一つの例なのかもしれないですし、それは、例えば、これは本当に無料でヒアリングするのか、それとも、しっかり聴かれる側の若者に対しても、お金なのか分からないですが、何かしらの予算をつけて、そこに対してある意味、しっかり感謝の気持ちみたいな感じを、何かしらをサポートするのか、その辺のあたりも全体としては、予算組みに関わってくると思うのですが、重要になってくるのかなとは思っています。

○土肥部会長　こども都庁モニターは500円分の図書カードを出していましたね、確か。これはすごく難しいところだとは思いますが。この市民参加というときに、対価が本当に必要なのかという論点もあると思うんですよね。

自分たちの街をよりよくしていくというところに対して。ただ、一方で、今全く信頼感がないというところではあると思うので。

ただ、例えば、500円もらえるから意見を言おうとなるかというところと分からないです。小学生とか、もっと小さい子供たちだったら、すごい大金ですが。

○大橋委員　また、予算の関連で、もう1つ。これは自分たちも、どこの支援団体もそうだと思うんですが、ここで支援団体と事前に連携しながらというところで、本当にどこも、支援現場は本当に忙しい中で、これをやろうと思ったときに、そこの部分の、それこそ経済的な部分も含めたサポートとかをどう考えるのかというの、全体としては考える必要があるのかな。

もちろん、「これは無償で、ボランティアをお願いします」というお願いの方法なのかという部分は、しっかり都の事業でやるにあたっては、考えられるといいのかなと。

なかなか自分たちも支援現場側なので、ここは言いづらい部分が非常にありますが、何かという難しいですが、特に小さいところとかもあると思うので、現場として、その辺をぜひ考えていければと思います。

○山本課長 その環境を整えるのにも時間がかかるでしょうし、それを全部ボランティアでというのはなかなか厳しいですね。

○大橋委員 小さいところとかは、結構厳しいかなという。

○土肥部会長 言いづらいですが。

○荒井委員 事前準備から実際に場をセッティングしてとかいうところも含めると、職員さんの手がかなりかかると思うので、その費用弁償は、何らかの形でされたほうがいいんじゃないかなとは、個人的には思います。

委託を受ける事業者というのは、具体的にどんな事をするかはまだこれからまとまっていくという形ですか。

○山本課長代理 実際のところ、企画自体は受託した事業者さんがトータルでやるんですが、再委託とかしていかないと、コンサルさんが直接足を運んで出向いてとかというのは、考えづらいのかなと思います。

○荒井委員 コンサルがやりそうな、おもしろくない企画じゃなくて、ちゃんと若者の声が拾えるような企画とかを考えられるような人たちが、受託できたらいいんじゃないかと思うんですが。

○山本課長代理 そうですね。

○土肥部会長 現実問題、では、そこがどこなのかということは分からないですね。

○荒井委員 こういうのは、どこかの団体がとかじゃなくて、こういうのに興味がありますみたいな人たちが集まって、そういうところに委託みたいな可能性はあり得るんですか。

○山本課長 コンソーシアムじゃないですが、組んでもらって、競争に加わっていたくのは可能だと思うんですが。

○土肥部会長 アイデアレベルで可能かどうか分からないですが、考えていたのは、進行管理だけコンサルがやってもらって、意見聴取の部分は、具体的な額は分かりませんが、50万ぐらいの額で、例えば、30団体に委託するとかとして、いろいろなところに、聴きに行ってもらった声を、同じフォーマットで集めて取り込んでいくみたいな方法とかがもしかしたらあるのかと思ったりはします。

あるいは、そのパッケージ自体はまるっと1個で出すという方法もあるかもしれません。

また、これも再委託で、どこと組むのかみたいなもので、どうですかね。東京都内の若者支援団体同士の関係性とかは、余り分かりませんが、あっちが立つと、要するに、あそこが取っていると、こっちが立たないとかそういうのとか、そういうのはないですか。

○荒井委員 どうですかね。若者を取り巻く課題というのは、結構その分野が多岐にわたるので、それがちゃんと網羅されたらいいなと思うので、先ほど言っていたポジティブ系も含めたと思うのですが、結構、いろいろな領域が混ざっているのが難しさとしてあると思うので、そこをどうやって綺麗にいろいろな声を拾っていくかというところが難しいだろうなという気がしますね。

○土肥部会長 これは、現実的にどこかコンサルが受託して、どこか分かりませんが、どこかの若者支援団体に再委託して聴きに行って、それを積み上げてもらってという座組が、一般的に想定される方法だと思うんですが、それだと問題が起こりそうだなというポイントはありますか。

問題というか、もっとこういうふうにしたほうがいいんじゃないかなとか。

○荒井委員 そうなると、予算の関係で、限られた団体にしか聴けないというのが、一つ弊害かと思って、そこは難しいですね。

先ほどの話ですと、公的な窓口は、先ほどのポータルサイトにいっぱい登録されているということを考えると、公的支援とかの窓口とかというのは、ヒアリングの対象にならないんですか。

○山本課長 そんなことないです。テーマによっては、それも対象になると思います。

○與那覇委員 コンサルだか再委託されたか分かりませんが、その人たちが聴くの

というのは、内容を聴き取って各自集約して送るのか。

例えば、「このアンケートがほしいです」というQRコードみたいなのを、先ほどのネットワークじゃないですが、1個パッと置いておけば、それを使って直接聴いたのを受託の人が、打ち込んで送ってもいいですし、例えば、広告にあったら広告からそのまま送れたりすれば、集計も統一的だし、方法もいろいろな方法ができるのかなと思うんですが、そういうのはどうですか。

○土肥部会長 集まった意見を1個のプラットフォームに集約させていくという考え方ですね。

○西山委員 どこまで数を担保できるかみたいなのところが一つあるんですかね。

大橋さんもおっしゃっていたように、お忙しい中で、各団体がどこまでできるんだろうみたいなところが一つ。

○荒井委員 そう考えると、アンケートみたいなものをバラまいて、それをある種「回答してください」とお願いを一生懸命汗かいてやる人たちが、この受託される人たちだったらいいんだろうと思って。

いろいろなところに「アンケートをお願いします」という形で、アンケートはすぐ、オンラインでも簡単に書けるものみたいな形に加えて、その団体のそばに居るところに、ヒアリングに行って直接インタビューするという、2本立てぐらいあったらいいんじゃないのかと思うので。

アンケートをとにかくあちこちにバラまいて、回答をいっぱい増やす担当と、ヒアリング、インタビューをちゃんとするみたいな、そういう感じになっていくといいかと思います。

○土肥部会長 アンケートというのは、その各居場所ということですよ。

○荒井委員 居場所とかも、後半で議論されるか分らないですが、オンラインツールを活用したときの拾うやり方も、このアンケートがバラまかれてもいいのかと思うので。

何かしら統一されたアンケートみたいなものがあるといいなと。そういうアンケートになってもいいんじゃないのかと思いました。

○小奈委員 最近だと、グーグルフォームとかで、QRコードを読み込めば、アンケ

ートできるというのもあるので、そういうふうにできるだけ簡略化すれば、より手間もかからずに、多くの人から意見は取れるのかと思いますね。

○大橋委員 自分も、今の荒井さんの意見はすごい同意で、実際に行かないと、先ほどお話しした、結局、そのあとのフィードバックの話とか、これがいかにちゃんと自分の声が聞かれたかみたいなことを実感するためには、これはアンケートというのは結構難しいだろうと想着いて。

アンケートで回答して、結局それがどうなったのか分からないというのは、これは先ほど話した、ある意味マイナスの経験にもなりかねない部分だと思着いて。

なので、そういう部分と、それとともに、ただ、いかに広く意見を集めるかという、たぶんこの2つの方向性があるというのは、荒井さんがおっしゃっているとおりだと思うので、そこは分けて考えてもいいのかなと、自分も思いました。

逆に、ちゃんとした施策への反映、そのあとどうなったかというためには、しっかり聴くという方法も絶対残しておく必要があるだろうと着います。

○土肥部会長 アンケートとか、オンラインツールの幅広くてというの、あとで議論したいのですが、アウトリーチで居場所にヒアリングに行くというときに、居場所の選定の仕方ということについては、どういうふうにしたらいいと着いますか。

○荒井委員 ヒアリングに行くときというのは、大体何か所ぐらいに行くとか、相場観というのはあるのですか。

○山本課長 全く、これからですね。

○荒井委員 できるだけたくさん上げて、できるだけたくさん行くというのではだめですか。

○西山委員 本当は、全部に聴けば、一番いいところですよ。

○土肥部会長 それを、仕様に落として予算化していくときに、数がないといけないかと思うのですが。

○西山委員 施策に落としていくみたいなときに、このぐらいの量があるといいとか、そこは、施策によって様々ですか。

○山本課長 多ければ多いほどいいのですが、予算もありますしね。

○土肥部会長 逆に、札を入れるほうからすると、それが、要するに仕様上で、50

と書いてあるのか、それとも、それが自由提案なのかによっても、また変わってくると思うんですね。

向こう側の企業努力で、「私たちは100もあります」みたいななのか、もう仕様の中で、もう50とか100とか30とか、ある程度数を絞ってしまうのかとか。

○西山委員 数の話から逸れますが、今、思ったのは、東京都の中でもいろいろな地域に行ったほうがいいなと思っていて、都心の団体もそうだし、多摩にも来てほしいし、東のほうも行くべきだしとか、その設定方法の中に地域の観点も一つあるだろうと思いました。

○荒井委員 そうやって考えると、量よりはその網羅がどれだけできるかと思うので、地域という切り口と年齢みたいなものもあると思うのですが、あと、その課題、その困難性とか、困りごとの種別によっても、ちゃんと網羅されているというか、その担保がされていればいいんじゃないかと思っています。

○土肥部会長 困難性の種別というのは、可能ですかね。

○荒井委員 私は、こども家庭庁の中の困難性みたいなものとかの、実態の把握の検討の委員に入っていたのですが、そこで、一旦レポートで困難性の分類みたいなものを、コンサルがすごいたくさんの文献を読み漁ってつくったので、ああいうものもやっているんで、できなくはないだろうと思うので。

あとは、それを東京都にはめたときに、この課題はどここの団体があるのかというのを、リサーチとか紹介とかみたいな形で網羅していくのがいいんじゃないかと思いました。

○土肥部会長 なるほど、そこに対してのスーパーバイズがあればという感じですかね。どうですか、事務局の皆さん。

○山本課長 そこに対するスーパーバイズというときに、どういうメンバーなんだろうかなというのが、もう少し具体になると嬉しいのですが。

○荒井委員 網羅できるか分らないですが、とりあえず、就労支援とか、ヤングケアラーとか、若年女性とか、生活困窮とかみたいな形の、結構大きいカテゴリーが若者支援もあると思っていて、そのカテゴリーで、社会的擁護とかの中での代表する団体とかに一旦メンバーに入ってもらったりすると、担保ができるだろうなという気が

するので。

その団体の人たちにヒアリングして、この団体がいいんじゃないとかやっていくというのが一つかと思いますが、誰か1人でスーパーバイズできる人がいるとは思えないので。みんなでやっていくしかないんじゃないかと思いました。

○土肥部会長 あと、場所もそうですが、スーパーバイズする人たちからの意見でもいいですが、仮想空間とかオンラインゲームとか、そういうオンライン上での意見を聴くというのも合わせてということですよ。

○大橋委員 今の議論から外れるのですが、何を聴くかということもすごく重要だと思っていて、先ほど、小奈さんがおっしゃっていたことに近い部分はあるんですが、自分たちがある程度、アウトリーチ型で行くとなったときに、来てもらうんだとなると、例えば、「このテーマに興味ある人来てください」となると、基本的に意見を言いたい若者が集まるというので、そこに何かネックになることはすごく少ないと思うんですが。

行くとなるとどうしても向こうの意見を聴きたい、聴かなければいけないという状況になったときに、もちろん、先ほどから出た網羅性とかというのもあると思うんですが、そもそも、そのテーマについて何か話したい若者がいるかどうかのがすごく重要だと思っていたときに、これは本当に庁内の調整がものすごく大変な部分だと思うのですが、どの局からどういう意見が来て、それに応じてどこに聴きに行くかという調整が、ものすごく重要なんだろうと思っています。

そうすると、先ほど、荒井さんがおっしゃったような、そこをスーパーバイズする人が必要だろうなというところと、それを考えたときには、もちろんいろいろなところに聴けばいいと思うのですが、果たして本当にその若者はこれについて意見を言いたいのかという視点は外せないなと。

例えば、うちもそうだと思うんですが、余り興味ないことがテーマで、聴きに来て言ってくださいと言われたときというのは、これは本当にやんないほうがよかった、やったことがすごくマイナスになってしまう部分があるのだろうと思うし。

自分の意見が、どうそのあと議論されたのかというのに、余り関心を持ってないと思うので、そこは若者の側に立って、その子たちが本当に言いたいと思っているテーマ

なんだろうとか、そのテーマ選びみたいな部分は、すごく気をつけて考えたほうがいいなあというところと、あと、これもすごく難しいと思うのですが、ある程度、ただ若者に興味あるテーマが何かということとともに、そのときに実際に意見をもらって反映させられるテーマというの、全部が全部もちろんそういうわけじゃないとなったときに、そこをどう各局からちゃんとテーマをたくさん集めるかみたいなところは、すごく大変だし、かなりやっていかなければいけない部分でもあるだろうな。

例えば、ここにあるところだと、困ったときに相談する人がいるか、いる場合、誰かみたいなこの質問は、結局聴いただけで終わっちゃうみたいなことが一番避けなければいけないと思う部分なので、ここの選定というのはかなりやらなければいけない。

でも、ここは、ある意味、外に委託した人ができるみたいな話ではないと思うので、本当に庁内調整がすごく大変な部分だと思うのですが、そこはかなり力を入れてこのテーマ設定はできるといいんだろうと思います。

○小奈委員 それこそ、前回の会議でも出たように、いかにカジュアルにこの話を聴いていけるかという部分が、自分もすごく重要だと考えておまして。

例えば、今、この例にあるようなものがついて、機械的といいますか、どうしても、本当にただ問答するだけというか、そこに血が通っていないという印象をどうしても受けてしまう部分があるので。

本当に、これは自分の今考えた話ですが、各居場所を運営されている団体さんができるのかどうか分からないですが、例えば、「今日はヤングケアラーについて話す日です」と言って、居場所を開放して、「それについて雑談でもしましょう」と言って雑談して、大体その中で何か不満だったりとか、悩みだというのは、大体出てくると思うんですね。

そういった中で、「では、それをどういうふうに改善したり、行政とかが対応したらいいかね」というような形で、最終的な身近な部分から提案というふうな流れを、できるだけつくっていききたいとは考えております。

または、もちろん我々は本当に宿泊型なので、そういうジャンルごとで、なかなか人を集めるということとはできないのですが、もしそれができれば、できる団体さんがいれば、そういう形でもいいのかなとは考えております。

○荒井委員 テーマというのはどうやって決めていくとか、今の段階であるんですか。

○山本課長 今の段階では、要するに、我々の部署が都庁内のプラットフォームとして、「困難な若者に対する意見を聞きたければ、我々聞きますよ」と。「どういったテーマで聞きたいですか」というのを募って、それを聴くという形だとは思ってはいません。今段階ですが。

○荒井委員 そのときに、「何のために聴くのか」みたいなところが結構大事な気がして、例えば、若者の支援というのは、これまで施策をつくってきたけれども、漏れているものが何かを特定するための意見拾うのと、どういう居場所をつくったらいいかという意見の拾い方とは全然違うと思うので。

これは、もう東京都として何のために聴くのかというのは、ある程度いくつかあたりがあったほうがいいのかと思うので、それはつくっていただいて、何のために聴くのかみたいなものははっきり打ち出してから、委託をしていくみたいなプロセスは、結構大事じゃないかなという気がしていて、そんなこと言っているのか知りませんが。

○土肥部会長 最初、そうすると若年支援課としてのテーマが前にありそうですね。

○山本課長 そうですね。

○土肥部会長 ほかの部署とかでもあり得るものはあるのかな。

○山本課長 いろいろ聴きたいものはあるかと思うのですが。例えば、産業労働局さんだと就労支援というところで、困難を抱えた若者に、「こんなことを聴きたい」とかあったりするのかなと。

○土肥部会長 あとは、聴きたいというのと、聴いてほしいというのもありますよね、若者たちから。

○山本課長 確かにそうですね。

○土肥部会長 だから、それは国の意見反映の審議会でも、この前議論になったんですが、今、国が聴きたいテーマだけを集めて聴いているので、自由テーマであったりとか、「こういうこと何でも言っていていいよ」というテーマの日というのは、あったほうがいいんじゃないかという話で、今年度それをやる予定で今進めています。

拡散してしまうかもしれないのですが、それをもとに、また論点を絞って意見聴取することもあり得るかもしれないので。

大体1時間ぐらいいやりましたが、これは支援団体の皆さんがちょうどいろいろいらっしやるのですが、「都から受託する事業者に求められるスキルなど仕様で条件付け」と書いてありますが、ここに求められるスキルというのはどういうスキルだと考えられるかというのは、もし、上げていただけると。

○小奈委員 無理なあれかもしれないですが、「できるだけ仕事観を出さずに来てほしい。」それで、スーツは着ずに私服で来ていただいて。どうしてもそういう仕事とかスーツというもののだけでも、結構拒否反応を起こしてしまうという若者は、特に私どものような支援団体にかかっている若者は、本当に多いので、それこそ私どもは地域若者サポートステーションを運営しておりますが、そこに居るスタッフも、スーツはほとんど着ずに、ここにプロレスのマークとかいてあるようなTシャツを着て、一緒にキャリア相談とかをやるぐらい、カジュアルさというのをできるだけ重視しているので、そういった部分の波長を合わせていただければ、より意見は聴取しやすいのかと思います。

○荒井委員 聴くというのは難しい行為だと思うので、例えば、こちら側の価値観が出た瞬間に、何かある種、この若者たちも答えてくれる部分が減ったりすると思うので、本当にこちら側の価値観とかをそんなに出不さずに、主義主張もそんなにせずに、本当にただ話を聴ける人というのが結構大事になるかと思うので、その辺は、支援者だと大体そういう資質があるんじゃないのかと思うので、何かしらそういう支援に長けたような人、なおかつ主義主張の強くない人、ある程度ちゃんと意見を拾えるようなスキルがある人だったらいいんじゃないかと思います。

○大橋委員 これは、先ほどの土肥さんがおっしゃった、最初に受けるコンサルの話と、それを聴きに行く、それが再委託なのか、またそこも違う形で委託するのか、それで当然違っていると思っていて。これは仮ですが、本当に先ほど小奈さんがおっしゃったようなプロジェクトの実際、マネジメントみたいなところでいいと思っていて、その人たちが、別に実際に現場に聴きに行くみたいなことは、基本的にしなくていいんじゃないかなとは思っているので、そういう意味では、この実際の支援団体とか聴きに行く人たちのスキル付けということになるのだろうと思って、そこは本当に皆さんがおっしゃるとおりだと思いました。

その上で、この事業は、東京都では、子供の分野はもう既にいろいろな施策をやられていると思うのですが、若者に対してやるのは、本当に初めてだと思うので、これを機に、そういったスキルを持った人たちが生まれる事業なんだろうと思ったときに、もしかしたら、例えば、研修とかの事業をここにやるのかとか、そういう人をどう増やすのかというところも、もちろん、もともとそういうスキルを持った人が入るのは重要だと思うし、それは例えば最低何年間そういう子供若者に関わった経験がみたいなスクリーニングが重要だと思うんですが、それだけじゃなくて、その上で、どういうふうなスキルを身につけてから現場に行ってもらうのかみたいな、そういう研修みたいなところが、本当はあったほうがいいんじゃないかなというのは思いました。

○土肥部会長 今いろいろ言っていたいただいたことを、仕様に落とすのもそうですし、採点表とか、これも難しいかもしれないですが、そもそも若者が審査員の側にいるみたいなことも、あり得るかもしれないなとは思いました。

ですので、実際に、自治体によっては、宮城の石巻市とか、指定管理施設の審査会で、子供審査員による事例も出てきたりしているので、“若者審査員”も入ってもらって、コンサルの最終決定は、彼らにさせたら重いかもしれないので、「私たちはこう思った」と、審査員に対して伝えるみたいな座組で、石巻はやっているのですが、そんな方法もあるかもしれないなと。

もちろん、支援団体ももしかしたらという方法もあるかもしれないですがね。

アウトリーチ型の事務局から特にほかに聞きたいことがなければ、オンラインツールのほうに移りたいと思いますが、

○土肥部会長 では、一旦アウトリーチ型は一区切りとさせていただいて、オンラインツールの活用というところに論点を移していければと思います。

今、ユーチューバーとの協力ということで意見、案を出していただいています、このオンラインツール活用について、ご意見がある方はいらっしゃいますか。

○荒井委員 非常に難しいですよね。というのも、上のアウトリーチ型で、どの団体にヒアリングに行ったいいかというのと同じように、このオンライン上のユーチューバーとかの界限も、いろいろなところに若者が生息していて、特に困難な若者がいっぱいたまっている配置とか、ユーチューバーとかのところがあると思うんですよ。

ただ、それがではどこなのかという知見というのは、この上のアウトリーチ型の団体はどこがいいんだろうというのより相当難しい気がしていて、そのリサーチからとかからやらないといけないぐらいな感じがすると思うので、

特に支援活動みたいな看板でやっている人たちは分かりやすいと思うんですが、結果、すごく支援とかじゃないけれども、特に困難な若者が溜まっているところはどこなんだろうというのを、どうやって見つけたらいいのかということなのかなという気がして。

そういうのも若者に聞けばいいんじゃないかと思いましたが、どこに若者が溜まっているのかというのをちゃんと把握しにくいというのが一つかなという気がします。

○土肥部会長 確かに、東京都の10代、20代が見ているだけだったら、ある程度は分析できるかもしれないですがね。

ただ、言われるように、そういう居場所や支援機関にアクセスできない困難を抱えた若者が見ているユーチューバーというのは、今、誰か分からない。

いただいたサンカクシャさんのこのアンケートの中でも、ユーチューバーから聴くのはいいんじゃないかという意見が出ていましたよね。ライブ配信による一問一答を東京都が公式にやればいいと思っているんですが。

確かに意見を聴くだけでなく、その場で回答してもらえるライブ配信とかはいいですね。誰が回答してくれるのかというのは。ただ言うだけだと、参加意欲が湧かないですがね。どうですか、ほかに。皆さん、YouTubeに限らず、オンラインとか幅広く聴く意見聴取とか。

○與那覇委員 例えば、SNSとかだったら、ハッシュタグみたいなのを使えば、集めるには集められるのですが、多く集めるとうまく絞れないし、絞ると漏れる人もいるかもしれないしという、このジレンマみたいなのが、ずっと難しいなあと思いながら聞いていたのですが。どうしたらいいのでしょうかね。

○西山委員 これは、匿名であるみたいなのが結構重要なんだろうなと何となく思うんですが、そうなったときに、本当に東京都の困っている若者なのかどうかみたいな、そこを、結構有象無象が集まるじゃないですか、SNSで集めると。

それを本当に施策に反映する。それでいいのかみたいなのはどうですかね。

ほかの施策でもこういうことやられているのかと思うのですが、どこまで信用するかというのは。

○山本課長 「本当にあなたは若者ですか」と、確認はしないですね。

若ナビαでも、対象はお伝えするのですが、もしかしたら超えている人がいるかもしれないですし。

○西山委員 それは、そういうものとして、それでもいいのでしょうか。

○山本課長 もう仕方がないということですよ。ネットで何か集めようとする、そうじゃなくはないですかね。

○土肥部会長 それが、結局、国の「こども若者★いけんぷらす」が、登録者が伸びるのがつまづいたのがそこではあるかと思うんですね。

「必ず個人の確認できる書類を提出してください」としたのですね。

報道で出ているのでいいと思うのですが、昨年の11月の時点で最初の登録上は4000人ぐらいになっていたのですが、結局、その後の本人確認ができているのは500人ぐらいになっていて、約3500人が止まっている状態になっていました。

わざわざ自分の免許証なのか、子供だったら学生証なのかを写真に撮って送って確認してみたいな、というのは、ひとつのハードルになるんじゃないかと思います。

○山本課長 ましてYouTubeでライブ配信して、ユーチューバーは、皆さんから質問したときに、「君は本当に若者か、東京都に住んでるのか」とかは、確認しようがないですね。

○土肥部会長 反映しやすいように、例えば、コメントのあとに「何十代」とかを書いてもらうとかいう工夫はできるかもしれないですがね。

静岡県も今、オンラインプラットフォームを使って意見聴取を、先週から始めたのですが、そういう子供・若者で、小学生から20代ぐらいまでの若者として、1週間ですが、100人ぐらい登録してくださって、結構順調でやっているのですが。

それは、最初にアンケートフォームがあって、そこでアカウント登録だけして、個人情報とかは特に取らないのですが、要するに、小学生ですか、中学生ですか、高校生ですかみたいなのを聞いて書いてもらうという仕組みになっています。あと、住んでいる地域とかですね。

アンケートというような話もありましたが、YouTube 以外の方法というのももちろんありますよね。YouTube も予算次第でしょうが、1 人のユーチューバーだけじゃなくて、複数人に出していくみたいなこともあるかもしれませんし、有名度合いによって金額がいろいろ変わるかもしれません。

○小奈委員 それこそ「特定のユーチューバーの人と、定期的に委託していきますよ」ということだと、それこそ、「その人が炎上したらどうすんだ」みたいな話もありますし、あとは、本当に先ほどの話も出ましたが、そういう例えば、小学生の子がよく見るユーチューバーの人、大学生の人がよく見るユーチューバーの人というように、結構年齢も分かれているし。

あとは就職について話をするユーチューバーとか、そういったテーマごとにも分かれていますので、そこは本当にジャンル別、あるいは年代別に分けて複数人を、もし委託するのならやったほうがいいかと思います。

○大橋委員 このユーチューバーの部分について、これは自分自身、結構皆さんおっしゃるように難しいだろうと思っていて、まず、このオンラインツール活用するという時点で、すごく広く、いろいろな若者から意見を聴くという意味においては、オンラインツールはすごく意味があるんだろうと思っていて、先ほど繰り返し申し上げている、「これを聞いて、本当によかったな」とすごく感じてもらえるとかというのは、なかなかそのあとも、もうオンラインを切っちゃったら、その人がどこにいるか分からないという、フィードバックみたいなものが結構難しいだろうと思ったときに、最初に荒井さんがおっしゃってた、ちゃんと聴くという、広く聴くというのが2つ分けたほうがいいんじゃないかという、たぶん、この後者のほうに、このオンラインのほうは当たるんじゃないかなとは思っています。

そのときに、このユーチューバーと連携するというのが、本当にいちばんいい手段なのかは、自分としてはどうなのかと思っていて、ユーチューバーというのは、今皆さんおっしゃった、視聴者層とかもかなり偏りがあると思いますし、本当にこれがベストなのかはどうなのかと思っています。

自分としては、本当に広くということであれば、それこそ、皆さんがおっしゃったような、例えば、何かハッシュタグをつけて、本当にいろいろな人に広めるとかで、

こうなると、特に困難な若者というところに絞るのは、そもそも難しいと思うんですが。

ここは、自分が最初に話したように、オンラインを使うんだったら、困難だとかというのを一旦そんなに考えずに、「若者というパイを広げることによって、困難な若者にもリーチできるよね」というような前提に立って、ある程度やるしかないんだろなというのは、今、思っているところです。

自分たちも、今までティックトックとかと連携しながら、例えば、ティックトックの広告欄に出るみたいなもの。国とかもやっていると思うんですが、基本的に自動で優先的に流れてくるとか、そこからすぐ、例えば、アンケートできるとかだったら、広くは広まると思うので、そういう部分にどちらかというオンラインについて力を入れたほうがいいんじゃないかな。

予算も限られている中で、そっちに力を入れたほうがいいんじゃないかと思ったので、このユーチューバーというのも一案として当然、事務局の方々が考えてくださっていると思うのですが、そもそもここなのかというのを議論したほうがいいんじゃないかなと、自分として思っています。

○土肥部会長 実質的には、費用対効果も含めて、ちゃんと分析はしたほうがいいかなとは思いますが。

ユーチューバーに、例えば、1本動画をつくってもらうとか、ライブ配信すると幾らぐらいかかるのかということと、実際にアンケートだったりとか、掲示板みたいな形で広告を回して、意見聴取するというときに、どっちのほうが集まるのかとか、フィードバックしやすいのかということ考えたときに、今どっちかなと分からないところではあるので。

ただ、一方でユーチューバーみたいなものを使うと、そのユーチューバーにもよると思うんですが、声を聴いているという、啓発とか広報的な意味にはなると思うので、東京都も本気で聴いているんだなという雰囲気は醸成されるかなという効果は、そういう効果もあるかなというのは思ったりもして、どっちもやれたらいいんですが。

○荒井委員 困難な若者の声を聴くとなったときに、広くというアプローチをとるのが果たしていいのかというのは、今一度考えたほうがいいかなという気がしていて、

どちらかというと、オンラインツールで広く意見を拾うやり方もあると思うんですが、もっと狭く深く拾うやり方も一つあるんじゃないのかと思っていて、例えば、ト一横キッズにいるカリスマ的なユーチューバーがいるとするじゃないですか。その人のところには、行政の相談に絶対に行かないけれども、ト一横にめっちゃたむろしている若者たちがいっぱいリスナーとしてはいるみたいなことで全然ありえると思うので、オンラインツールの活用も、すごくニッチな狭いところに聴くというやり方もあるのかと思うので、それが誰なのかというのは難しいですが、そうやって、支援団体をリサーチするというのも、このユーチューバーとかのリサーチするみたいなのは、一つのやり方としてあるかと思うんですが、それはあくまでも仮説があつての上かと思うので、それを今年度やるかやらないかみたいなのも、一つ議論としてはあるのかなとは思いますが。

ただ、絶対言えるのは、その支援団体とかにつながるとか、そもそも支援を受ける、受けないみたいな、支援界限がリーチできる層と、全然そうじゃない人がいるというのは間違いないので、その全然支援とかにリーチしない人たちの声を聴くというやり方に、かなりピンポイントに聴いていくというアプローチ、一つあるんじゃないのかなとは思いますが。

○土肥部会長　そういう意味では、3回目以降にもう少し幅広い若者たちの議論をしていくと思うので、もしかしたら、このオンラインのほうはそっちで拾って行って、荒井さんが、前言われたと思うんですが、1回だけじゃなくて、2回も3回も来てほしいというような話とかあったんですが、そうやって通っていくことによって、問題の構造がより深く理解できるということもあるかなということも考えると、もしかしたら、訪問型をもっと厚みを持たせてやるというやり方もあるかもしれないですね。

もう少し、深い構造が理解できないと、そこから施策反映していくというのが、表層的になってしまう可能性もあるかと思うと、そこには新しさがあるかもしれないですね。

3回目以降の議論が読めないなので、あれですが。

○山本課長　確かにアウトリーチ型をもっと手厚くというのはあるかもしれないですね。

もともと YouTube というのは、要は支援団体につながっていない若者たちの声をどう集めるというお話でしたよね。

ネット空間も居場所になってたりするよという話で、では、そこにアプローチしていけばいいんだという話だったのですが。

○土肥部会長 あと、都庁内の整理かと思うんですが、どっちかという、困難を抱えた若者の意見を聴くということに集中的にやられていくと思うので、オンラインで聴くというのを、もう生活文化スポーツ局だけで持ってやるのかどうかみたいな感じにもなるのか。そこを、要するにオンラインはもしかしたら共同でやるとか、そういうこともまだ、次年度以降のことが全然分からないまま話をしていますが、逆に、若年支援課でそれを持ってしまうと、ほかの幅広く若者声を聴くというのが、縮こまってしまう可能性もあるのかと思って。

ちなみに、そういう意味では、次回以降かもしれないですが、政策企画局としてはどういうふうに若者の声を聴いていくみたいなことも、幅広くやっていこうというような計画はあるということです。

○栃折課長 具体的に計画があるかという点は、この部会でご議論いただきながらかと思っているんですが、先ほどもお話に出ておりました、子供に関しては、広く今意見を聴けているところですが、若者の方々については、その部分は弱いなというところが我々の課題としてありますので、その部分をうまく意見を聴いて施策に取り入れていくというようなところをやっていききたいなというところで、今とどまっているところでは。

そのあたりも、ご議論いただきながら、考えていけたらと思っているという状況です。

○土肥部会長 もし、全ての若者に聴いていくという方法も、オンラインでやるというと、重なってしまいますよね。

逆に、居場所に来れない、アクセスできない若者たち、支援に洩れた若者たちに対しての方法というのが、オンラインツールの活用だったと思うのですが、それ以外の方法でも聴きにいくとなると、どんな方法があり得るでしょうか。

出向いていく先を変えていくって感じですかね。居場所、要するに支援団体のところだけじゃなくて、もっと野良のというか。

最近、京都市がユースサービス協会というユースセンター、若者支援総合センターをやっている団体があるのですが、そこが移動型のユースセンターを始められて、パンを配りながら、若者たちの居場所をやるとやっているのですが、1台そういうトラックというか、移動型でいろいろなところに行って聴くみたいなのも、もしかしたらあるかもしれないです。

誰がそれやるんだみたいな。

でも、最近、名古屋市もそういう仮設居場所みたいな感じで、大通りの真ん中にそういう場所を仮設でつくって、路上で聴くみたいなこととかやっていますね。

○西山委員 これは、私の経験上の話ですが。

私も高校時代、ネット空間に居場所がある人だったんですが。私は図書館に行っていて、すごく静かで、誰とも関わらなくていいような、図書館とか公共空間でもそういう、ただで居れて静かに誰とも関わらずに居れるような場所があるんだろうと思うと、そういうところに出向いていくというのはどうですか。

そこに居る人たちにどう聴いていくのかというところもありますが、知らない間に居場所になっている場所はあるそうだと思います。

○土肥部会長 実際、ト一横とかに出て行って、聴きに行くみたいなこととかは、もう既にやっておられたりするんですけど。

○山本課長 相談窓口を開設していますからね。

○荒井委員 そうなってくると、相談窓口へ一度行ったけれども、微妙だったみたいな。もう切れちゃった人たちとかは、少なくとも拾え、やり方どうするかですが、拾えなくはないと思うのでんですが、クレームの窓口をつくって、クレームを聴きながら、その意見も聴くみたいなのができたらいいのかと思うので、たぶん何かしらみんな一度はどこかで連絡するとかはやっていることが多いけれどもつながらないみたいな、その層の声も聴くというのが、せめてできるといいと思いましたね。

○土肥部会長 相談窓口に不満がある会みたいな、そういう窓口をつくる。そういう窓口をまたつくる。

要するに、どこにも連絡しないみたいなことは余りないということですか、人によるでしょうが。

○荒井委員 あると思うんですが、そこにリーチする工夫とコストを考えると、まだ1回リーチしたがだめだったので、実際、支援団体とかにつながっている層は、もうつながってちゃんと定着した層ですが、1回つながろうとしたけれどもだめだった層を、その次のステップとして聴きにいくアイディアを考えるのはいいんじゃないかなと。

その次に、全くどこにもつながらない人たちにというステップがあるんじゃないかと思いました。

○土肥部会長 相談窓口に対してのそういうクレームだとか意見を聴くみたいな、あとからフィードバック、アンケートを取るとか、そういうことはやっておられないということですか。

○山本課長 アンケートは取っています。

○土肥部会長 アンケートは取っていますか。

○山本課長 その相談はどうでしたかみたいな。本当、簡単なアンケートですが。

○荒井委員 そこに、聴きたいことを盛り込むというのはできなくはないですよ。

○山本課長 できなくはないですね。今、どれだけ相談している人が手間と思うかどうかだと思うのですが。

○荒井委員 そうですよ。

○與那覇委員 全然話がそれちゃうかもしれないのですが、先ほど大橋委員がおっしゃっていた、何を聴くかが大事という点と、アンケート方式で取ったときに、フィードバックがもらえないのが一方通行だという話から、意見の聞き方を工夫する必要があると思います。この例を見てお話すると、「困難を抱えた若者にとって求められる居場所とはどのようなものか。」というお題に対し、「これは、全然興味ないです」という人が、例えば、「2025年、若者の新たな居場所を開設予定です。以下のアンケートに教えてください。」のような、何の施策をする予定だからこのアンケートを聴いているんだよというようなタイトルにすれば、まず、そもそも興味を持った人は、答えた後も続きを調べるだろうし、興味も持ちやすいかと思います。この聴いて

いる内容が「今、この施策の中のこれを聴きたいんです」というのが、ちゃんと明確なほうがみんな答えてくれやすいのかなと思っています。

○荒井委員 それで言うと、支援団体側の立場からすると、その若者支援においては、その施策の数も足りてないですし、今打っている施策に穴も多いというところを考えると、どこに穴があるのかというのを特定するための意見を聴くというのは、何か一つあってもいいんじゃないのかと思うので。

そういう意味で、いろいろな課題の種別に対してヒアリングするとか、いろいろな団体のところにヒアリングするのは、そういう意味もあるのかと思うので、そこはぜひ一つ一つ入れていただきたいと思うところです。

○土肥部会長 今の聴くテーマとか聴き方の話は、それこそ上の話とも絡むかもしれませんが、もし幅広く聴くとなったときに、コンサルさんとか事業者さんだと、その座組をつくるのは得意ですが、そこで広告を回していきたいだとか、どういう問いをつくるかとかというところは、余り得意じゃないなあと見ていたりして、

仕組みをつくって、とりあえず、やみくもに広告を回すんですが、全然集まらないみたいなこととかが結構あると思うと、そこに、コピーライティングだったりだとか、デザインだったりとか、そういうことも含めないと、単に別にそれがかっこよくなくてもいいんですが、すごいダサイポスターみたいな形だと、全然意見を入れないとなったりもするかもしれないので、そこはそこでスーパーバイスというか、考えなければいけないかもしれないです。

○西山委員 この問いかけの仕方というところと、例えば、アンケートでやるとしたら、アンケートに答える側に益があるかどうかみたいな話でいうと、このテーマで、例えば、聴くんだとしたら、「あなたがほしい居場所はどういうものですか」みたいな聴き方をすると思うんですが。

それで、例えば、「ちょっと上のお姉さんと語れるような居場所がほしい」みたいな答えてくれたとしたら、「じゃ、あなたにおススメなのはここです」みたいな感じで、リコメンドしてあげるみたいな。

そうすると、そのアンケート結果を施策に反映することもできるし、その子自身も自分に合う居場所を見つけることができるみたいな、そういう形でできないかなと思

って。そのためには、実際、既存で活用されている団体と連携することが必要になると思うんですが。

○土肥部会長　すごく予算があれば、そういうチャットロボットみたいのがあってもいいのかもしれないですがね。かつそこで意見聴取もできちゃうみたいな感じに。

○西山委員　500円配れば答えてくれるかどうかというのも、本当は、その子たちは500円を求めるんじゃなくて、自分の居場所を求めているということを考えると、それにも応えてあげられるような仕組みにできるといいんだろうと思いました。

○土肥部会長　話が拡散してきているのかというのは、またどういうふうにしていくかというのは感じになってしまっていますが。

立ち返ると、どうでしょう。YouTube というのは、もう余りなさそうだなあという、そういう感じですかね、どうですか。

○與那覇委員　難しいですよ。

○山本課長　広く聴くということは、確かに、第3回、第4回の議論を見ながら、改めて考えるということは、一旦必要かもしれないですね。

○土肥部会長　ユーチューバーとのコラボの仕方、そういう困難性というか、テーマ設定とか、やり方によっては、そういうふうに絞っていける可能性も、もしかしたらあるのかと思ったので。

あと10分ぐらいにはなるんですが、何か全体を通してでも結構です。冒頭にも言ったんですが、困難を抱える若者たちの意見を聴くという議論を、集中的に意見できるのは、今日までとなるので、何かありますか。

何か、事務局のほうで、ここを聴きたいとか。

○山本課長　皆さんにご意見だけお伺いしておきたいと思いますが、ヒアリングしたときの対価というんですかね、若者当事者に対して、何らかのという話があったのですが、皆さん、それぞれのお立場ではどうお考えになりますか。

○村上担当部長　それは質とか規模によるんですかね。どこまでやってほしいから、それによって1人当たりの単価は上がるし、100人なのか10人なのかによっても違って来るだろうし、イメージがあったほうがいいですかね。

一概に「1本100万円で何でもやります」とか、その人にかかるコストをどれぐ

らいにかけるかとか、どれくらいやるのかによっても違って来るんですよね。

○荒井委員 何となくザッと思うことを上げようとする、例えば、やるとしたら、若者に集まってもらって、そのときに「ピザ用意します」とかのお金とかだったら、すごく若者たちも喜ぶだろうなというのが一つあります。

もうちょっと違うやり方とすると、例えば、1人に対して1万5千円とか1万円とか出すのであれば、ちゃんと生い立ちとかも聴くとか、若者にも多少負荷がかかるような形を謝礼で出してやるみたいな形が一つかなと。

あと、団体に対してどんどんお金を出して、その代わり団体としてはかなり頑張っ、声が拾いにくい若者たちもちゃんと聴いてもらうような座組をつくとか、その団体の予算の中で、そのピザを用意するとかみたいな工夫は、それぞれにお願いするみたいな感じかと思います。

○大橋委員 うちでも、調査研究とかでインタビューしていく場合もあるんですが、そのときは、額とか自分は今パッと分からないんですが、若者にも、お金を実際に、支払いいただいて受けるという、個別で。

それは、うちは実際にあって、それで、今、荒井さんおっしゃったように、結構いろいろなことを本当に聞いて、本当に1対1で結構長くみたいなインタビュー形式で、それが今回に当てはめるはまるか分かりませんが、実際そういう事例としてうちはあるなあとということ。

今の荒井さんに付け加えて、実費の負担分は、確実に出せるのが重要かと思っています。

これは普段の支援もそうですが、そこに行くという交通費が出せないとか、そういう子が当然いたりとかするので、うちも交通費とかは、払えない子には実際に出してたりするんですが、ここは明確にしっかりそれがちゃんと明確にあるのか、その謝金の中にそういうのを組み込むとか、払う仕方があると思うんですが、実費負担は。

こっち的には無料で思っている、若者からしたらお金的にマイナスということが結構あるという認識はあるなと思います。

うちも、「お金ないから、居場所に月一しか来れません」みたいな子がいたりするときに、そういう「交通費は出せるよ」というお話をしたりするので、そこは意識で

きるといいかなとは、荒井さんに追加したいと思います

○小奈委員 先ほど、荒井委員、大橋委員からお話があったとおり、そういう生い立ちから含めて話をするという場合は、私どもでも、例えば、団体紹介するときに実際に、「寮に居る若者を連れてきました。生い立ちをしゃべってください」という場合だと、本当に少ないですが、お金が発生するようにはしております。

ただ、私どもは本当に宿泊型施設ですので、聴こうと思えば、その当人たちの部屋に入って、そのまま「聴きたいことがあるんだけど」と聴けば聴けるんですがね。なので、その手間というのは、そこまでないといえませんがね。

それこそ、私どもだと、夜中も宿直者がおりますので、例えば、夜にゲームしている人たちに「ちょっと聴きたいんだけど」みたいな感じで聴くことは可能ではありません。

先ほどから、「困難を抱える」という命題があると思うんですが、本当に宿泊型の施設に来るということは、居場所にも来れなかった、居場所に通っていくこともできなかった。またひきこもってしまった。親御さんが困ってうちに相談に来るというパターンが多いので、本当に困難レベルでいうと、割と高い子が多いですね。

なので、それは先ほどの「何を聴くか」という部分にも関係してくると思うんですが、本当にその困難を抱えた人に意見を聴きたいということであれば、そういった宿泊型施設から意見を聴くというのが一つあるのかと思いました。

金額と関係ない話になってしまいましたが。

○土肥部会長 皆さんの意見を聞くと、無料ということ、全く何もないということはないということですよね。

本当、有識者ヒアリングとかでも、いろいろあると発生しましたね、何らかの対価は。そんなに大きな額ではないかもしれませんが。

そう考えると、若者のヒアリングというのと、意見聴取というのは、同じ土俵で考えるべきなのかというのは、考えるポイントかと思ったんですよ。

ある意味、例えば、タウンミーティングとかワークショップとかいろいろありますが、そういうものに参加してもらえるかということ、そんなにもらえないことのほうが多くて、むしろ、それは市民自治の問題ですよ。

なので、「こども大綱」上でも言われたように、子供の意見を聴くというときの意義の2つ目に、民主主義の担い手を育成するという考え方があるので、そこから則って考えたときに、実費弁償みたいなものはあってしかるべきじゃないかと思いますが。それが自分たちのよりよい社会づくりにつながっていくという感覚を持ってもらうということを踏まえると、変に対価が発生してしまうと、それはそれでおかしいことになってしまうような気もしなくはないです。

お菓子が出たりとかはあってもいいかもしれないですが。

あと、聴く度合いにもよって変わるというお話もあったので、そこは、確かにそうだと思います。

マーケティング会社みたいな感じになってしまいますね。都としてそうあるべきなのかというのは、どうなんだろうと思いました。

○山本課長 実費弁償と聴きやすい環境づくりのための、先ほど出たピザとか、音楽なのか、はあってもいいのかなという感じですかね。

○土肥部会長 あとは、先ほど言われたように、団体側に委ねるという方法も、もしかしたらあるかもしれないですね。

○土肥部会長 でも、どうなのでしょう。団体によっては全部懐に入れるところと、そうでないところとか出ると、それはそれで問題ですが。

でも、団体さん側に払われる金額によって、その準備の本気度みたいなのも変わってくるかもしれないというのは、別の論点ですが、そうだと思いますね。

数千円しかもらえないヒアリングにこれだけ準備をかけるのかみたいな話なのか。本当に十万円とかもらったら、ちゃんと準備しないと思うかもしれませんし。

○荒井委員 先ほどの話で、意見を聴くというのとヒアリングというのはまた性質が違うような気がしたときに、この意見に聴くというのは、それはそれで考えるとして、特にこの場に来ている子たちにはヒアリングがあったほうが、ヒアリングというのは何のためにかというと、本当にそのよりよい施策をつくっていくためだったと思っていったときに、彼らがどこでつまづいたかとか、どういう施策があったらよかったのかみたいなのを、ちゃんと聴くヒアリングというのは、それはそれでまた2つ分けて考えるみたいなのが一つかと思ったので、ヒアリングのあり方とその意見を言うみた

いなのが、また若干分けて整理したほうがよさそうだなというのは、最後の最後に。

○土肥部会長 確かに欧州の若者政策の考え方と若者の専門家は、若者という考え方のもとで、若者の声を聴くということをやっているのです、そういう意味で、有識者ヒアリングと、そこでは、同じ土台で考えていいのかと思うのですが。

広く聴いたりとか、聴く度合いによって、自発的に参加するかどうかというのは、もしかしたら、1個あるのかもしれないですが、頼んで参加してもらうとなると、何となく何もないと。

居場所の中での集め方にもよるのですかね。今度、例えば、「東京都の人の意見を聴きにくるけど、意見言いたい人」で集めるのか、例えば、「ヤングケアラーの話が聴きたいから、あなた参加してもらえない？」と絞って参加するのか、その辺で変わってくるという感じですね。

時間が来てしまったので、閉会に向かっていこうかと思いますが、言い残しとか大丈夫でしょうか。

○大橋委員 繰返しになるんですが、実際、これから落とし込むにあたって、この意見の反映をどうするのか、フィードバックの部分はちゃんとしっかり、それをやるということと、明記みたいなのところと、そこに力を入れるみたいなのところは、この方針としてもすごく大切にしたいなと。今日感じた部分なので、そこをぜひということで。

もし、例えば、先ほど複数回という話もあったと思うんですが、フィードバック、2回目はそのフィードバックとまた次の意見を聴くみたいな感じで、本当に継続的にやっていくと、土肥さんとか荒井さんがおっしゃったように、関係性づくりとかもできて、またそれは1回聴くのとまた違うような効果があると思うので、その辺は終わったあとのフォローと継続的みたいなのところは、継続的な部分は今後検討事項かもしれないですが、フィードバックについてぜひ落とし込んでいただけるとありがたいと思います。

○土肥部会長 まとまらなくて、また事務局の皆さんに、汗を掻いていただければいけないのですが、ここからまた事業化につなげていければと思います。

そうしましたら、最後に次第4で、事務局からの連絡についてお願いいたします。

○山本課長 第3回の若者部会につきましては、既に日程調整をお願いしているところ

ろですが、また改めて開催日程をご連絡させていただければと思います。

本日は様々、具体的な多岐にわたりお話しいただきまして、これはまとめてまいりますのでありがとうございました。どうぞよろしく願いいたします。

○土肥部会長 ではこれで閉会いたします。ありがとうございました。

午後 5 時 3 2 分閉会